

真宗同学会大会研究発表要旨

群疑論における仏身仏土の観方

村 地 哲 明

中国初唐の浄土教家である懷感の遺著である『釈浄土群疑論』七巻は、一百二十一章（古本説は一百二十三章・校点本説は一百十六章・私は一百二十一章と見る。）の問答体の組織を以て構成するものである。そしてそれらの章中、仏身仏土に関して述べられるものは、五十三章の多きに達し、全体の章数の四十四%弱を占めている程である。しかも『群疑論』においては、かかる仏身仏土の課題が各処に散説されていて、論理的に組織的に体系づけられて論述されていないため、甚だ理解し難いものである。いま各処に散説されている論述をいささか整理し、研究してみた結果の要旨を述べてみたいと思う。

また、総標身土章では、仏身について、法性身・受用身・変化身の三身の浄土があることを説いている。そしてかかる仏身仏土の観方は、玄奘訳に由来する仏身説と一致する。しかし、その詳述について依用せられた經典が悉く大乘の空系の經典であったことは、とにかく注意を要する。さらに懷感は、上述の受用土と変化

土との基本的意義を明示する三義中、まず第一に、浄土を真如為体論であることを説いているが、これは従来の唯識法相宗の学生であるとすると観方を否定する方向へ導く一資料であり、かつ、師の浄土観が実大乘教に基盤することを示すものであろう。第二は、淨心所現の浄土とする観方であって、これは懷感の浄土観の特徴を最も端的に頭わしたものと云ってよい。第三は、衆宝莊嚴の浄土とする説であって、これは浄土教が浄土教としての教学的成立の意義をここに顯示するものと見られよう。

さて、懷感は阿弥陀仏を上述の三身中の何れの仏身と見たかというに、道忠の『探要記』（浄全六・二一頁下―二四頁上段）以来、西方三義章の第三説である、地前は変土に、地上は他受用土に往生するという観方が、懷感の立場であるとせられてきたのである。しかし、『群疑論』の所説を綿密に研究すると、懷感はかかる聖道教的通報化の立場を鋭く批判し、凡夫が仏の本願力によって報土に往生することを明瞭に説き示している。しかしながら、専雑二修章には、雑修の人の往生する浄土は化土であると示され、事理俱生章では、有相念仏は事浄土に、無相念仏は理浄土に、無漏の因は報土に、有漏の因は化土にという立場が頭わされ、漏無漏土章等の諸章では、凡夫は如来所変の無漏土について有漏の浄土を表現して、その中に生ずるといふ見方を立て、以てその浄土を無苦と説き、そして有苦の浄土には任運起俱生の惑を容認したり、喜受と捨受とを是認したり、あるいは行苦の存在をも容認するなど、実に種々複雑なる浄土観が示されているのである。したがって、懷感の浄土観には、善導等の凡入報土説や、迦才等の通報化の観方を受けて、新たな浄土教的法報化の仏土

論を展開せしめたところにその意義を見出し得るのであった。

つぎに、いささか仏身観についてもふれてみたい。懐感は古来から三昧発得の師とされている。師の仏身観は、念仏三昧の観仏論が主であって、観浄土の義は少ない。念仏三昧には有相の念仏三昧と無相の念仏三昧との二種の行業があつて、かかる有相の念仏三昧の麤の色身観から、無相の念仏三昧の細の法身観へと展開することを説き、これらの義を『華嚴経』等の経説に基づいて詳述したものである。

清沢先生とキリスト教

幡 谷 明

清沢先生について語られる場合、先生の所謂三部経と云われる、阿含経・エビクテタスの語録・歎異抄については、これまでも屢々問題にせられて来た。しかし、明治の仏教徒にとり或る意味では自らの存亡にかかわるものとして、重大な意義をもつものであったキリスト教に対し、清沢先生はどのような態度をとられたかという点については、これまで論及せられたものを見出すことが出来ない。

では清沢先生は、キリスト教に対して、全く無関心であつたのだろうか、否、決してそうではない。確かに清沢先生のキリスト教観を窺い得る資料は、決して多くはなく、僅か二三の断片的なものを出ないが、しかしそれらの中には、他の明治の仏教徒の示

した態度とは異なつた、先生独自のものを見出すことが出来るように思われるから、以下その点について、少しく窺つてゆきたいと思う。

明治三十二年発行の『名家仏教講演集』には、先生が知恩院で講演された「仏教の興起」という一文が戴せられているが、そこには、次のような明治仏教史についての先生の見解が示されている。(全集第六卷所収・四五六―四六五頁)

(1) 廃仏毀釈によって仏家が俗人同様の姿に顛落した時……維新时期

(2) キリスト教の進出に刺戟されて学理や哲学で對抗した時……明治二十年代前后

(3) 信仰の本領を知つ時……三十年代

その第三段階について、先生は、「宗旨的の信仰を以て初めて仏教真正の教徒とするものである。彼の耶蘇教の如きも、黙從信を以て數百年間欧州の天地に宗教たるの位置を保ちて居たが、彼と此と教理の浅深に比較すべきものでないから、今且らく措いて弁せぬが、仏教もつまり教理深奥、中々吾人浅見の其の妙蘊を伺うべきものでないから、宗旨的の信仰に皈して其の妙理海中に遊泳するより外はない。」と云われている。ここに吾々は、先生のキリスト教及び仏教に対する根本的態度を見出すことが出来るであらう。すなわち先生にとって、仏教とキリスト教との比較対照ということは、問題にならなかつたのであり、それは、明治三十四年伊勢四日市の関西仏教青年会の夏期講習会における講演、「精神主義(その二)」(全集六卷・六一―六五頁)の上に、更にはっきりと見出される。ここでは、天文説や創造説の論議によつ